

Departure English Expression I, II

〈指導資料・副教材の特徴と活用法〉

Departure I——文法の扱いの観点から



加藤治之

◆はじめに

「高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編」は「文法」という言葉を46回用い、その扱いについて次のように述べている。

- (1) 文法はコミュニケーション能力育成の基盤。
- (2) すべての文法事項を「コミュニケーション英語 I」で扱う。
- (3) 言語活動を行うことが授業の中心となっていれば、文法の説明は日本語を交えて行うことも可。
- (4) 用法を細かく分類し網羅的に指導するのではなく、実際に使用させながら、意味の微妙な違いや使用頻度の高い表現などを身につけさせる。
- (5) 解説や問題演習に終始せず、言語活動と効果的に関連づけて指導する。多くの言語活動を経験させることによって言語は徐々に内在化される。

以下、上の各点と関連づけながら *Departure I* の文法の扱いおよび指導資料・副教材の特徴と活用法について述べる。

◆重要項目の網羅と配列・各課の話題

コミュニケーション能力の育成を念頭に置きながら、伝統文法に基づく主要全項目を縦軸、各課の話題を横軸に据えて、両者をなるべく紡ごうとした。この方針はすべての課で貫かれているが、最も典型的な例は、助動詞と環境問題 (Lesson 6)、比較と人口問題 (Lesson 13)、関係代名詞と尊敬する人物 (Lesson 14)、仮定法過去完了と日本の歴史 (Lesson 19) などに見えていただけたと思う。

◆日本語による指導

中学・高校の英語の総授業時数は、多くても800時間程度であろう。これは「アメリカの学生が日本語学習で Professional Proficiency レベルにまで到達するのに要する時間は約4,400時間」という指摘 (河合忠仁 (1998)「第二言語学習の開始時期」『英語教育』大修館書店、6月号 p. 21) と比べると、わずか5分の1以下という少なさである。このような状況下で効率的な英語習得を目指すには、文法指導を主として日本語で明示的に行わなければならないことは、生徒が獲得している母 (国) 語を利用するという積極的な意味においても、理の当然である。(もちろん、英語による指導を排除するものではない。)

◆文法項目の精選

英語表現の単位数は多くない。どれほど文法が重要といっても、細かい用法に分類し網羅的に解説・指導・問題演習を行っていても、十分な言語活動は行えず、言語の内在化も果たせない。*Departure I* では、各課の Expressions を5つに精選した。全20課でおよそ100項目となるわけで、これだけの文法項目を習得すれば、英語表現の基礎力は十分身につくが、巻末に Expressions for Expansion も設けた。この appendix は、単に細かい文法項目を追加したのではない。実践的な表現力の拡充に大いに役立つものと信じる。

◆指導資料 (TM) について

各課の文法解説は、コミュニケーション能力育

成の観点から、その文法項目の意義・指導法・意味の微妙な違い・言語学の新知見などを述べた。

ここで一言述べさせていただかなくてはならない。当然のことであるが、文法というのは、言葉の使用があって後から整理・記述されたものであり、その逆ではない。常に Use が Usage に先立つ。各校の ALT を始めとするネイティブスピーカーたちが、教科書の本課や Expansion の英語表現について、他の表現を提示することがあるかもしれない。それが生きた言葉の実態を反映していることには反論の余地はない。しかし、*Departure I* で示した英語は厳選されたものであり、生徒に自信を持ってお示しいただきたいと思う。われわれは生徒に、まず、規範となるべき文法項目を習得させる必要があるからである。たとえば、仮定法過去完了の指導で *I hear the party was great. (1) I wish I had been able to go. の代わりに (2) I wish I could have gone.* という言い方がある。これなどは *Grammar in Use Interme-*

diate にも記載されている表現ではあるが、生徒に対する仮定法過去完了の指導としては、(1)の形を示すほうが理解しやすいし、あえて言うなら「基本」だろう。指導資料では、この辺の英語の実態を紙幅の許す限り Google の英米のサイトや COCA (=the Corpus of Contemporary American English) などにも言及しながら扱っている。

◆副教材『グラマーノート』(GN)

GN は、単なる文法演習ノートではない。言語活動と関連づける問題を可能な限り取り入れた。教科書だけでは不十分な練習量確保のためにぜひともご活用いただければありがたい。編集には7人が関わり創意工夫を凝らしたつもりだが、改善の余地はあると思われる。全国の先生方からの忌憚のないご意見をいただき、よりよいものにしていきたいと思っている。

(かとう はるゆき・京都府立嵯峨野高等学校教諭)

Departure II——書く力と自己表現の観点から

II は I で培った基礎力を元に、一文から複数のパラグラフまで書ける力を養い、場合によってはディベートやディスカッションなどで自分の考えを表現する力までつけられるよう工夫した教科書となっています。そのために副教材として『ライティング・サポート・ノート』をご用意しました。

Part 1 は、並べ替えや和文英訳に取り組みながら、アイデアを1つの英文で表現できる力をつける練習問題。Part 2 はテーマに沿った語彙力をつけながら、段階を追ってまとまった文を書いて最終的には1パラグラフ書ける力を身につけられる練習問題。いずれも大学入試も見据えた本格的なライティング力を生徒が身につけられるよう懇切丁寧に「サポート」することを追究したワークブックです。

また教科書 Part 3～5 に対応した『活動用ノ

ート』もご用意しました。最終的にはプレゼンやディスカッションする力を身につけるところまでいけるように、ブレインストーミングや構成・肉付け、そしてエッセイ・ライティングとその推敲までを練習しながら、その活動を記録できるノートになっています。繰り返し自分の「表現過程」を振り返ることにより、真の表現手順が身につく工夫がされています。

Teacher's Manual では I から受け継がれる文法の徹底解説に加え、文章を豊かにするための語彙や表現を豊富に紹介し、本格的なライティング力を養うコツをふんだんに盛り込み解説しています。また、今までその入り口程度までの案内にとどまっていたディベートやディスカッションについても具体的なやり方、および指導手順を使える表現集とともにご用意しました。

真の「ライティング力」と「英語表現力」養成のためのツールとしてご活用ください。(編集部)